

乃木坂スクール

見えない私が聞こえない世界から学んだ
コミュニケーションの可能性

— 盲ろう支援・バリアフリー映画の視点から「障害」について再考する —

東京大学先端科学技術研究センター
学際バリアフリー研究分野 特任研究員
大河内 直之

自己紹介

- 大河内 直之（オオコウチ ナオユキ）
- 1973年 4月生まれ、52歳
- 東京都出身
- 視覚障害（全盲）、先天性の緑内障
生まれたときは弱視、4歳で失明
- 東京大学先端科学技術研究センター 特任研究員
- 内閣府障害者施策アドバイザー
- NPO法人バリアフリー映画研究会 理事長

これまで大河内が携わってきた仕事

- 視覚障害者のリハビリテーション非常勤指導員
→ 中途失明者に点字やパソコンの使い方を指導
- 点字の出版 → 点字書籍等を製作
- 視覚障害者向け音声読書機の開発
→ 2次元コードを使った視覚障害者向け音声読書機を開発



音声読書器
スピーチオ

現在、大河内が携わっている仕事

- 盲ろう者向け支援技術に関する研究
- 視覚障害者向け支援技術に関する研究
- 映画・演劇のバリアフリー化に関する研究
- 福祉のまちづくりに関する研究
- その他、企業や行政との共同研究

障害者の問題に興味を持ったきっかけ

- 和光大学への入学 → 障害を持つ学生がたくさん在籍している
- 「障害者問題を考える会」というサークルでの活動
 - 盲、ろう、肢体不自由など様々な障害者と出会う
- 自分以外の障害を持つ人たちとの出会い
 - 特に、手話・ろう者とのコミュニケーションに興味を持つ
- 「見えない」という自分の障害についても
 - 少しずつ考えるきっかけになる

手話に興味を持ったきっかけ

- 入学して間もなく朝の通学時にろうの先輩に声をかけられる
- 聞き取れた言葉は「スクールバスに乗るか歩いていくか」という質問
- 手話ができない自分になぜその先輩は声をかけたのか最初は疑問
- 和光大学では一人で歩いている見えない人に聞こえない人が声をかけることは日常的
- 視覚障害の先輩に教えられる
- 不鮮明な声でも話しかけてくれたコミュニケーションに感銘を受ける
- 自分は手話は目で読み取れないものの表すことは可能であることに気づく

見えない私と手話

■ 手話講習会への参加

→同様の視覚障害先輩の誘いで

学内のろう者が教える手話講習会に参加する

■ 手話は触ってもいいものだということを教えられる

■ 初めて覚えた手話は

「分かる」「分からない」「もう一度」という手話

■ 手話以外のコミュニケーション手段

(指文字、手書き文字、口話、声)があることを知る

→多様なコミュニケーション方法の重要性を認識する

盲ろう者との出会い

- さらに同様の先輩に誘われ
大学1年生の冬、東京の盲ろう者の会の1泊旅行に参加
- 初めてお話したのは手のひら書き文字を使う盲ろう者
- 盲ろう者には様々なコミュニケーション手段がある事を
改めて実感する
- 盲ろうの会は大学で学んでいる「異種障害」を持つ人同士の
コミュニケーションを実践できる場だと感じる
- 盲ろう者の 通訳・介助活動
盲ろう者のICT支援の活動につながっていく

盲ろう者とは

- 視覚と聴覚の両方に障害を併せ持つ人
- 日本の推定手帳交付盲ろう者数 : 14,329 人
(2012年度厚生労働省障害者総合福祉推進事業「盲ろう者に関する実態調査」より)
- 通訳・介助者派遣事業登録盲ろう者数 : 1,182 人
(2024年度社会福祉法人全国盲ろう者協会「盲ろう者向け通訳・介助員派遣事業」)
- その生活実態はほとんど把握されていない
- 障害の程度はさまざま
- 障害を受けた順番でニーズやコミュニケーション方法が異なる

盲ろう者の障害の程度

- 全盲ろう：全く見えない、聞こえない
- 盲難聴：全く見えない、少し聞こえる
- 弱視ろう：全く聞こえない、少し見える
- 弱視難聴：少し見える、少し聞こえる



これらすべてが盲ろう者

| | 全く見えない | 少し見える |
|---------|--------|-------|
| 全く聞こえない | 全盲ろう | 弱視ろう |
| 少し聞こえる | 盲難聴 | 弱視難聴 |

盲ろう者の多様性

- 先天性盲ろう者 : 生まれつき盲ろうの人
- 盲ベース盲ろう者 : 最初に視覚障害者で後から失聴して盲ろう者になった人
- ろうベース盲ろう者 : 最初に聴覚障害者で後から失明して盲ろう者になった人
- 中途盲ろう者 : 成人してから視覚と聴覚をほぼ同時期に失って盲ろう者になった人



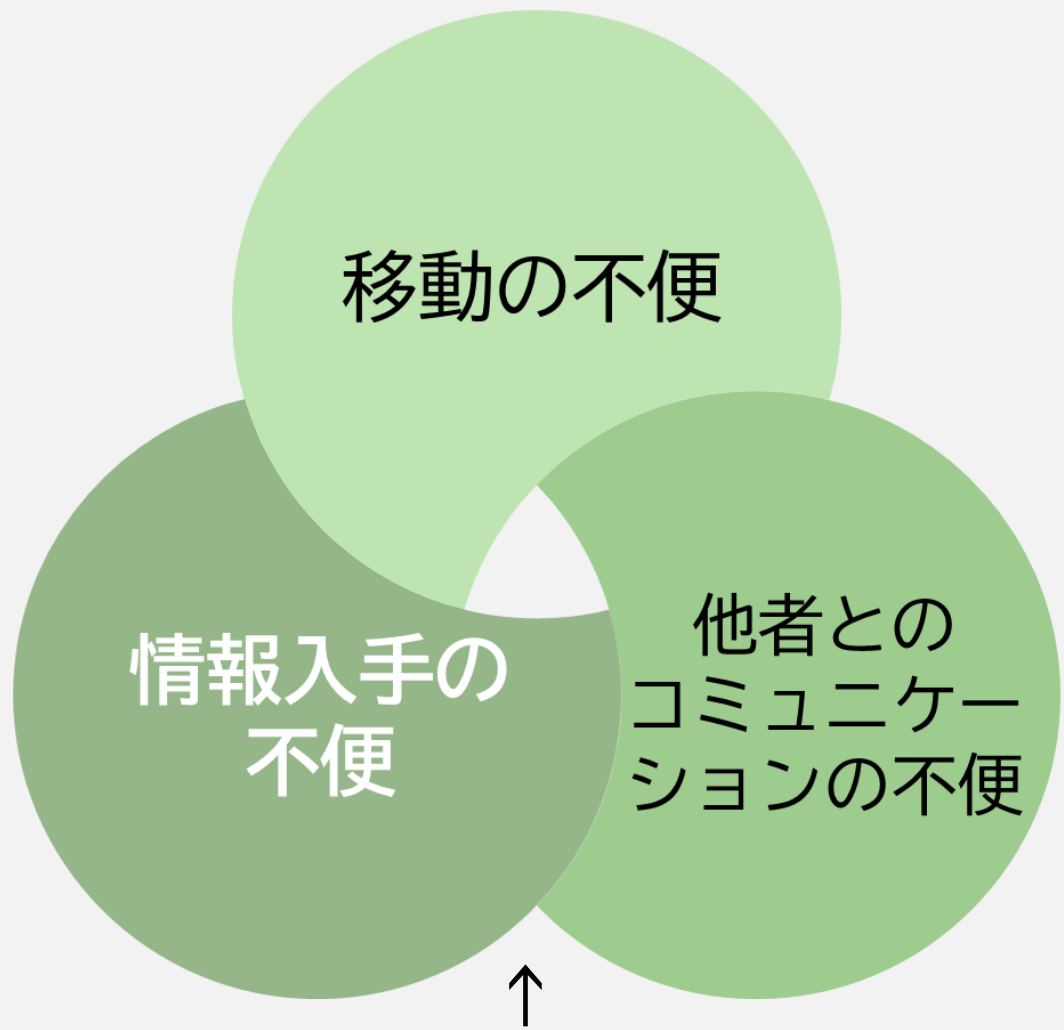
同じ障害であっても受障時期の違いによりその特性は大きく異なる

| | 先天盲 | 中途失明 |
|------|----------|-----------|
| 先天ろう | 先天性盲ろう者 | ろうベース盲ろう者 |
| 中途失聴 | 盲ベース盲ろう者 | 中途盲ろう者 |

盲ろう者の通訳・コミュニケーション手段

- 指点字 : 主に盲ベースの盲ろう者が利用
- 触手話 : 主にろうベースの盲ろう者が利用
- 接近・弱視手話 : 主にろうベースで弱視ろうの人が利用
- 音声 : 主に盲、弱視難聴の盲ろう者が利用
- 手書き文字 : 文字を知っている盲ろう者が利用
(幅広く使われている)

盲ろう者の不便



↑
日常生活を送る上で非常に大きな制約を受ける

盲ろうという障害のとらえ方

- 盲 + ろう ではなく 盲 × ろう
- 単独の視覚障害や聴覚障害と比較してその不便さは10倍とも言われる
- 「透明な牢屋に閉じ込められている状態」とも表現される

盲ろう者の人的支援の状況

- 通訳・介助者と呼ばれる支援者を中心に支援が担われる
- コミュニケーション・状況説明・移動・
（必要に応じて）対話・見守り等、非常に幅広く臨機応変な支援が求められる
- 盲ろう者支援の 8 割 は通訳・介助者が担っていると言える
- しかしながら、年間利用できる通訳の派遣時間は居住する地域によって大きく異なる
- 通訳派遣時間が多いところでは 年間 1,080 時間、少ないところでは 240 時間 あるいはそれ未満

盲ろう者が直面する社会的障壁

- 日本において法的に「盲ろう」という障害の定義は存在しない
(身体障害者手帳には 視覚障害 1 級、聴覚障害 2 級のように記載される)
- そのため、盲ろう者のための特別支援学校、職業訓練施設等も存在しない
- 盲ろう者を総合的に支援するための機関
「日本版ナショナルヘレン・ケラーセンター」を
創設することが、盲ろう者をはじめ関係者の最大の目標！！

バリアフリー映画とは

- 視覚障害者向けに画面の状況を解説する「音声ガイド」を付与する
- 聴覚障害者向けにセリフ等に「字幕」を付与する、話者の違いを色などで区別する、音楽等の情報を字幕で示す

日本におけるバリアフリー映画の変遷 1

- 2000年頃より、視覚障害者を中心としたバリアフリー映画鑑賞団体の活動が活発化
- 2008年度より、厚生労働省の支援を受けて、映画を製作段階からバリアフリー化するための研究事業がスタート
 - 2か年の事業の中で、音声ガイドと日本語字幕を付加したバリアフリー映画を 10 作品製作
 - 同時に「バリアフリー映画研究会」としての活動が始まる
- 2010年、音声ガイドと字幕が付加された成人向け映画が「『エロバリ』
(エロティック・バリアフリー・ムービー)」というブランドで製作、上映、DVD化される
(合計 3 作品が製作される)
- 2011年、第24回東京国際映画祭にて、音声ガイドと字幕が付加されたバリアフリー映画が初めて上映される
(それ以降2015年まで毎年同映画祭でバリアフリー映画の上映が実施される)

日本におけるバリアフリー映画の変遷 2

■ 2015 年、経済産業省の支援を受けて、スマートフォンやスマートグラスを使った新しい音声ガイド・字幕提供システム「UDCast」の調査事業が実施される

実際の映画館にて、UDCast を使った上映の実証実験等を実施

■ 2016 年 8 月より、UDCast を使った一般の映画館での字幕・音声ガイド提供がスタート

現在 日本では 800 タイトル 以上の映画に対応

字幕提供の課題

- 音声ガイドに比較して字幕の普及が進まない
- スマートグラスが一般的に普及しておらず非常に高額
- 聴覚障害ユーザからはスマート眼鏡ではなくスクリーンに直接字幕を出す「焼き付け字幕」への要望が強い
- 映画業界からは焼き付け字幕に対する抵抗も根強い
- スマートフォンやタブレット端末等を活用した字幕提供が模索されている

バリアフリー映画の課題（その他）

- 外国映画におけるバリアフリー化が進んでいない
- 製作した音声ガイドや字幕素材をどのように管理、保存、二次利用するかについてルール化ができていない
- チケット購入システムのアクセシビリティが不十分
- 劇場の車いす席の増設・複数個所設置が実現していない

バリアフリー映画体験

バリアフリー演劇への展開

- 映画のバリアフリー化の手法をベースに 2018 年より演劇のバリアフリー化の活動を実施
- 字幕・音声ガイドに加えて舞台手話通訳を導入
- 字幕・手話は聞こえない当事者が、音声ガイドは見えない当事者がそれぞれ監修を務める
- 演劇のバリアフリーは内容の情報保障のみならず、客席と舞台の垣根をなくすことにあることを知る

バリア（障壁）とは

- もともと自然界に存在しているものではない
- 人が作り出してきたもの
- 自分とは異なる立場の人がいることを意識するだけでバリアは少しずつ軽減
- 障害者や高齢者に多く存在するが基本的に誰にでも存在する

四つのバリア

- 物理的バリア : 段差や階段等
- 情報文化のバリア : 言葉、文字、習慣等
- 法律のバリア : 欠格条項等
- 心・意識のバリア : 全てのバリアを作り出す要因

バリアフリーとユニバーサルデザイン

- バリアフリー : 困難を除去、軽減すること
- ユニバーサルデザイン : 多くの人々が共用できるようにすること
- バリアフリーの発展形がユニバーサルデザインではない
- バリアフリーとユニバーサルデザインは類似しているが異なるアプローチと考えるべき

ユニバーサルデザインが強調・推進され過ぎた弊害

- 駅等のエレベーターを必要とする人が円滑に利用できなくなった
- 多機能トイレを必要とする人が円滑に利用できなくなった
- 「すべて優先席」にして優先席が利用しにくくなった

立場や視点の違いを踏まえてユニバーサルデザインやバリアフリーを再考する

- 選択肢を広げる取り組みは非常に重要！！
- しかし障壁を除去することが大前提
- また新たな障壁を生み出さない調整も必要
- 場面や立場によって選択肢が少ない人と多い人がいることを想像する
- バリアフリーと UD は併用して取り組まなければならない
- 設計のみならず運用にもしっかりした思想が必要！

障害のとらえ方→「Impairment」と「Disability」

- 障害には、「Impairment」と「Disability」の二つの概念が存在
- 「Impairment」障害は人の心身にあるという考え方 → 医学モデル
- 「Disability」障害は社会と人との関係の中に存在するという考え方
→社会・文化モデル
- 近年のバリアフリーや合理的配慮は社会・文化モデルに基づいて
取り組まれている
- 個人の障害を取り除くのではなく、社会の障壁を取り除くことで
バリアを取り除くことが重要！！

「障碍」と「障害」の使われ方

- 個人の心身にあるものを「害」というのは失礼という理由で「障碍」や「しょうがい」などが使われる→医学・個人モデル
 - 社会の仕組に欠陥があって不便が生じているため「障害」を使うべきという考え方もある→社会・文化モデル
- 一般的には未だに「障碍」や「しょうがい」の記述が多い

見えない私が聞こえない人や手話に出会って 感じたこと・考えたこと

- 自分とは違った障害、違った文化、違った価値観があることを意識するようになる
- 見えないことを素直に肯定している自分に気づく
- 「盲」という言葉を大切にしたいと思うようになる
- コミュニケーションは通じることのみならず、通じないことも含んでいる
- 「障害」や「健常」ではなく、そもそもみんなできることとできないことがある
- 障害は極めて地続きなものであることに気づく

連絡先

- 大河内 直之（オオコウチ ナオユキ）
- 東京大学先端科学技術研究センター
学際バリアフリー研究分野・福島研究室
- E-mail : okochi@bfp.rcast.u-tokyo.ac.jp
- 〒153-8904 東京都目黒区駒場4-6-1
駒場リサーチキャンパス 3号館 503号室
- Tel:03-5452-5067
- Fax:03-5452-5068